重機動兵のじゃれあい

おもみつぎ

錆びた鉄の匂いが鼻についた。劣化し穴だらけのコンクリートが剥き出しの地下整備場。どこから伸びているのかわからない配線が天井を這い、色あせたケーブルの隙間から人口太陽の光が見える。壁の換気扇はとっくに壊れ、拾ってきた旧世代の空気清浄機が悲鳴をあげている。部屋の隅には回収される気のない穴の開いた有機ゴミ袋が崩れないよう芸術的に積まれている。

辺境惑星特有の自然の豊かさも、衛星港の喧騒もない場所に少女と男がいた。少女は、部屋の汚さに似つかわしくない新品の光沢を放つ流線型のゴーグルをかけ、多くのレバーやペダルの付いた椅子に座り、ガチャガチャとレバーを動かしている。人の手で手直しされた学生服が下層市民であることを表していた。少女から少し離れたところにつなぎの男がいた。ボロボロの一目で使いまわされたとわかる金属缶を開け、布巾を湿らせ工具をふいている。

奥には鉄の巨人が鎮座していた。錆びつきくすんでいるがその光沢は生物でないことを示していた。人の六倍ほどの体躯を持つ鉄の巨人にとってこの整備場は窮屈で、かがむように身を小さくしていた。がっしりとした無骨なフレームに、応急処置の溶接跡が痛々しく残っている。赤い単眼を男が覗きこみ洗浄剤をかけ磨く。長い長い戦争の、旧時代の重機動兵の生き残り、サイクロプス。

「……こいつは、次持たないかもしれないな」

スパナを拭きながら呟いたのは、少女の相棒であるメカニックだった。洗浄剤の青にまみれたつなぎの袖で汗をぬぐうと、視線を少女に投げた。「お前が無理をさせすぎるからだ」と言いたげな目だった。

少女は手を止めゴーグルを外し椅子から立ち上がる。無言でサイクロプスの傷だらけの身体を見上げた。二ヶ月前、彼女はこの機体と共に裏のリングに出た。戦争ではないが命を賭けた、非合法のロボットバトル。賭けの対象であり、見世物であり、ときに処刑だった。

最初は震えていた。だが今は違う。震えるのは、興奮のせいだ。

「相手、機体名はアピラクネ。見た目は建設重機だったけど中身は旧帝国軍の多脚砲台。装甲は厚めで殴り合いはそこそこ。ワイヤーを使った変則機動で判定勝ちが基本戦術。背部にS社規格のジョイントがあるから、武装制限解除ルールだと……だったよね」

「ああ。しかも、今回はパトロンがおかしい。元兵器設計局の技術屋って話だ。想定される純粋な火力だけなら、今まで倒してきた機体のどれより上だ」

「……なら、逆にチャンス」

少女はそう言って、不敵に笑った。男が眉をひそめる。

「おい、まさかまた――」
「次も近接で仕留める。元が砲台ってことは、接近戦に持ち込めば有利になる。多脚の利点を近接戦で持ち込めるほどの戦闘システムも技術も無いと思うから。左肩のブレード、あれを改良できない？」
「無茶を言うな。馬鹿が。今のままでもこいつの出力じゃ、ブレードを使うだけで立つことすら厳しいぞ」
「じゃあ、軽量化して。装甲も、関節も」
　まるで自分の肉体を語るかのように、少女は機体の構造を口にした。男は舌打ちしたが、それ以上は反論しなかった。
「……本当に、お前は狂ってるよ。最初にここに転がり込んできたときは、ただの迷子みたいな顔してたくせに。どれだけ装甲を厚くしても小突かれるだけで泣いていたのに、慣れるのがはやすぎる」
　少女は、笑わなかった。ただ、自分の胸に手を当てた。最初は、逃げ場所がほしかった。あの街に、地上に居場所なんてなかった。
　でも、リングにはあった。命を賭けたふざけたバトルに、目的があった。勝てば金が手に入り、名前が広まり、力が証明される。
「狂ってるなら、それでいいよ。あたしはここで生きてる」
「……壊れるなよ。お前も、こいつも」
　男はそう呟いて、フレームの奥に手を突っ込んだ。工具の音がまた響き始める。
　少女は黙ってそれを見ていた。次の戦いを、頭の中で何度もシミュレーションしている。人口太陽が落ち地の底のような整備場で、彼女の目だけが、光を帯びていた。